

令和西播磨風土記

制作 第10期西播磨地域ビジョン委員会
令和西播磨風土記づくりチーム



詳しい取材記録は兵庫県HPに掲載中！
QRコードを読み込むか、「令和西播磨
風土記」で検索！

問合せ先
西播磨地域ビジョン委員会事務局
(西播磨県民局県民交流室県民活動支援課)
兵庫県赤穂郡上郡町光都2-25
TEL 0791-58-2128

はじめに

『播磨国風土記』は、奈良時代の文化風土や産物、地勢等が記されている地誌で、現代の私たちに一三〇〇年前の故郷の様子をありありと伝えてくれている貴重な宝です。私たちは、時代を超えて過去の地域の様子を知ることができます。

「令和西播磨風土記づくりチーム」は、西播磨の令和版風土記を作るため、地域の魅力を作っている「ひと」や「団体」に光をあてて取材や意見交換を行い、その記録を冊子にまとめました。

この小冊子『令和西播磨風土記』には、地域で頑張っておられる方々の活動への熱い想いが詰まっています。ぜひご覧いただき、その想いを感じ取ってください。

【令和西播磨風土記 目次】

はじめに	1
相生市林業研究グループ、赤松手づくり鎧かぶとの会	2
赤穂緞通弥生工房、NPO法人いねいふる	3
大鳥圭介生誕地保存会、皆田和紙保存会	4
ガレリアアーツ&ティール、桔梗隼光鍛刀場	5
コバコ株式会社、宍粟まちづくり株式会社	6
太子日本語学習支援ボランティアグループ、NPO法人上郡ひがし蔵net	7
碧川かたを朝ドラの主人公にする会、コラム「高瀬舟の歴史」	8
取材の概要	9
おわりに	10

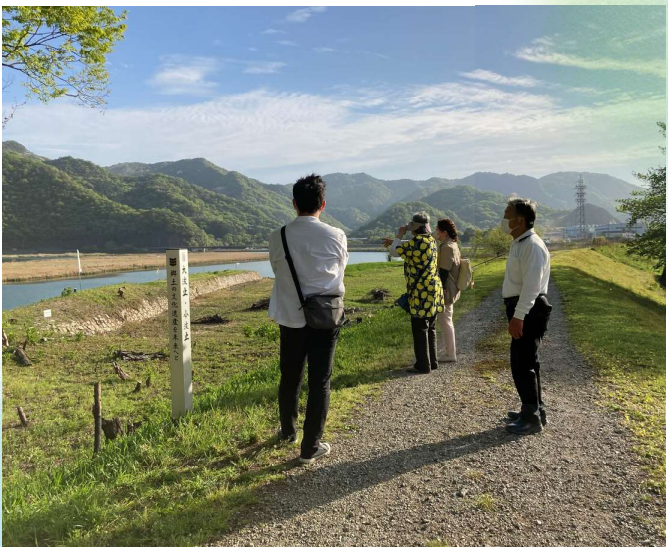
おわりに

お話を伺う中で、歴史や伝統を未来に残す、新たな魅力を作る、新しい課題に取り組む等、活動理由は様々ですが、全体を通じて、後継者不足という課題や団体・地域を超えてのネットワーク作り・交流が必要だということが見えてきました。そして、皆さんの何よりの共通点は「西播磨が大好き」という想いでした。

『令和西播磨風土記』は作って終わりではありません。さらに多くのひとや団体が交流し、新たな動きが生まれる一助となることを願っています。

末筆ながら、この活動にご協力いただいた全ての方々に厚くお礼申し上げます。

令和4年3月
令和西播磨風土記づくりチーム メンバー一同



高瀬舟船着場・大波止にて（赤穂市東有年）

林産物を生かして技術を磨き、交流の輪を広げる

相生市矢野地区で、林業技術の向上や特産品開発、生きがいつくりの拠点として発足した相生市林業研究グループ。陶芸、炭焼き、竹工芸、木工製作の4つの部会から構成され、素材の特性を生かしたものづくりを大切にしながら、林産物の活用及び地域産業の伝承、その後継者の育成を目的として活動されています。

特に次世代への活動が活発で、出張授業や「ふるさと交流館」でMy箸づくりなどワークショップの開催、竹細工の体験教室やトライやるウィークの受け入れなど多岐にわたります。作品製作を通じて、人や地域との交流を大切にしながら自然との共存を楽しんでおられるのを強く感じました。「活動では、多くの学びがあり視野も広がる。今後も若手会員の入会促進に力を入れ、更なる発展を目指したい!」と先を見据えておられました。(H)



相生市林業研究グループ
Aioi City Forestry Research Group

相生市旭1丁目1番3号
(相生市役所建設農林部農林水産課工務地籍係)
TEL 0791-23-7156

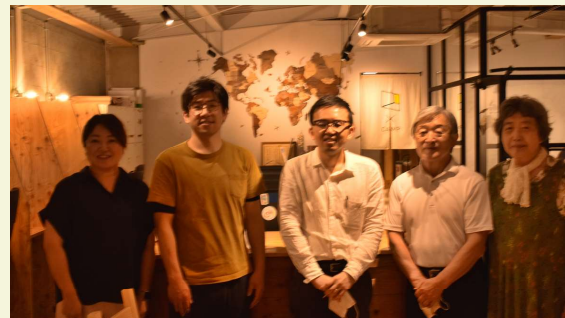
『令和西播磨風土記』作成に係る取材の概要

【取材実施期間】 令和3年4月～12月

【取材対象者】 西播磨地域で活動する団体のうち、13団体を選定

【取材担当者】 第10期西播磨地域ビジョン委員会令和西播磨風土記づくりチームメンバー6名

～取材にご協力いただいた皆様と写真撮影～



甲冑づくりは地域づくり

毎年11月、上郡町赤松地区には鎧かぶとを身にまとった武者が集結し、行列を作って練り歩く。色とりどりの鎧かぶとは、どれも本物に見えるが、厚紙などを使って手作りされたものだ。定年退職を機に教室に通い半年かけて作った人、子供や孫のために心を込めて作った人、鎧かぶと作りに魅了されて沢山作っている人…それぞれが様々な想いで作った鎧かぶとが歴史と伝統ある赤松地区を彩る。「最初は白旗城祭りを盛り上げたいと始めた鎧かぶと作りが、今は地域づくりの礎も担っている」と語るメンバー。皆で集まって難しい作業をすることで地域の人と人とのつながりが生まれている。



赤松手づくり鎧かぶとの会
Association of Akamatsu Handmade Armor Helmet

赤穂郡上郡町苔縄67 (赤松公民館)
TEL 0791-52-4605
<https://yoroikabuto.k-akamatsu.com>



最近では町外のイベントにも呼ばれ、様々な市町と交流の輪も広がった。赤松地区の受験生には「落ちない城」のお守りとして、合格祈願絵馬もプレゼントしている。地域の歴史と誇りを次の世代にも伝える活動は地域の「石垣づくり」となっている。(M)



「碧川かた」の生きかたを通じてたつのと日本を繋げる

女性の活躍推進が叫ばれている昨今、NHKの朝ドラでは様々な困難をはね除け、力強く生きる女性たちの人生が注目されている。誰もが知る童謡「赤とんぼ」は、たつの市が生んだ詩人・三木露風によって作られたが、その母である「碧川かた」を知る人はまだ少ない。かたは、母としての家庭人、看護師として働く職業婦人であるとともに、婦人参政権の獲得のために力を尽くした人物。昭和2年に『女権』を世に出した。現在、当たり前前に享受している女性の参政権はかたたちの行動の賜物だ。

碧川かたの人生や思想を学び共感することで、現在の女性活躍のあり方も見えてくる、と学習会を月に1回開催している。いろいろな人に響くかたのストーリーを将来は朝ドラの主人公にして、多くの人に届けたい。(M)

【HP】



碧川かたを朝ドラの主人公にする会

Association to make Kata Midorikawa
the main character of the morning drama

たつの市龍野町富永1439 (ガレリアアーツ&ティール内)
TEL 0791-63-3555 (事務局:ガレリアアーツ&ティール)
090-1673-0500 (発起人:瀧口 節子)
<https://katanokai.com>

江戸後期、中村(現赤穂市中広)で暮らしていた児島なかが、高松で出会った中国緞通に魅せられ、これを赤穂で作り商品化したいと、30年かけて独自の技法を完成させたのが赤穂緞通の始まりです。亀甲、福寿、蟹牡丹、鳳凰など、邪気を払う瑞祥紋様が多く、京の茶人、名高い料亭、豪商に好まれた。天皇の御召列車や枢密院の玉座にも天蚕を使用した赤穂緞通が採用された。

大正時代隆盛を極め、昭和12年頃綿花輸入制限により緞通場が閉鎖。戦後再開するが高度成長で機械化に向かない手作業の織元は廃業。平成3年には緞通場は1軒になりました。そこで、赤穂市教育委員会が主宰、技術伝承者の阪口キリエさんを講師として「赤穂緞通織方技法講習会」を開講。根来節子さんは、受講した20数名の女性の一人。「赤穂緞通を多くの人に知ってもらいたい」と話す根来さんは、若手を育てながら更なる飛躍のため、赤穂を中心とした「無農薬綿花栽培」、赤穂コットンを草木染し安心した糸で、地産地消の付加価値の高い商品開発に取り組む。(H)

次代へ紡ぐ緞通の歴史



赤穂緞通 弥生工房

Ako Dantsu Yayoi workshop

赤穂市古浜町119 (赤穂緞通 弥生工房)
TEL 0791-45-0025

誰も取り残さない社会を作るための enable (いねいぶる:可能にする)



NPO法人 いねいぶる
Non-profit organization ENABLE

たつの市龍野町堂本179
TEL 0791-62-5488
<https://enabletatsuno.com>

【HP】



たつの市で障害福祉サービスとして生活支援・就労支援等を行うNPO法人いねいぶるの理事長宮崎宏興さん。その事業の傍ら、人とひとのつながりを大切に紡ぎながら取り組む【T-SIP (ティー・シップ:たつのソーシャルクルーザープロジェクト)】としての活動も注目です。『誰もが誰かを包み込む社会になるためのプロジェクト』として様々な切り口から事業を展開し、その全てが私たちに何かを訴えかけ深く考えさせられるコンテンツで実に興味深い。

「決して社会を変えようとか、問題提起をしたわけではない。ただこの人にとって必要なことは?やりたいことは何か?を追求しながら、できる方法を皆で考えて作り出し、それを周りがサポートする社会を作りたい」「色々な【点】を打つことでそれが社会全体に広がりを生み出し、まち全体が皆にとって暮らしやすくなれば良い」と語る宮崎さん。

いねいぶるの名の如く、【誰も取り残さない社会】の実現を可能にしていく勢いを感じました。

(I) 3

コラム 高瀬舟の歴史

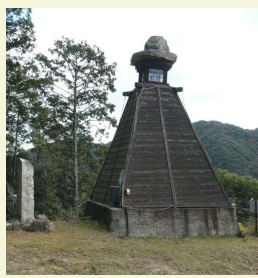
高瀬舟は、揖保川水系において、江戸時代初期には運行が確認されているようです。

荷物を運ぶ高瀬舟は、網干の海から三十km上流の山崎まで上っていたと言われます。

三百年余りの間、盛んに利用されていて、その行き来する様子を見たある人は「下る時は、荷物を積んで素早く走りすぎていく男性のような舟、上りは、白い帆に春風をそよがせて、しずしずと上る女性のような舟、みていて飽きることはない高瀬舟…」うまく言ったものだ。

千瀬川水系では、近世における最も早い時期の記録としては、一六一五年佐用町上月村に七艘の高瀬舟の存在が「佐用郡誌」にみられる。

「下りは、ほぼ流れにまかせて漕をこぎ、上りは、船頭が舟のおもてで棹を持って舟を操り、舟子二人は罾頭笠に蓑を付け素足に草履履きで、高瀬綱を肩にかけて岸辺を引いて歩いた。(下りは、一日・上りは二日を要した)高瀬舟が往来する碇泊地では、経済的、文化的、人的な交流が盛になり繁栄の基礎が醸成された。」(H)



高瀬舟灯台 (赤穂市東有年)



高瀬舟 (復元) (佐用町久崎)

上郡町役場前に威厳を持ちたたずむ銅像がある。近代日本の礎を築いた郷土の誇り「大鳥圭介」像である。圭介は天保3（1832）年に現在の赤松市石戸地区に生まれた。医師を目指して閑谷学校や適塾などで学ぶ。旗本に取り立てられ、歩兵奉行にまで昇進し、戊辰戦争では箱館戦争まで戦い抜いた。維新後は、新政府にも優秀さを買われ、大蔵小丞、陸軍大佐などを歴任。工部省では伊藤博文に引き抜かれ、技術官僚として殖産興業政策に貢献し、工部大学校長、学習院長、工部美術学校校長を務めるなど後進の育成にも励んだ。その後、外交官となり日清戦争の外交交渉にもあたり、男爵を授けられた。

圭介の生誕地にある「いきいき交流ふるさと館」では圭介に関する資料を展示している。圭介の偉業を語り継ぐとともに圭介を通じて住民同士の交流も図っている。「日本中の人に偉大さを知って欲しい」と「大鳥圭介検定」も開催。何よりも、地元の西播磨の人たちに圭介の生涯を学ぶことで時代を超えた圭介の「想い」を学んでほしい。(M)



大鳥圭介生誕地保存会
Keisuke Otori Birthplace Preservation Society

赤穂郡上郡町岩木丙445-1
(いきいき交流ふるさと館)
TEL 0791-52-4605 (赤松公民館)
<http://ootori.cosmos2016.net>



町の誇りを日本の誇りへ

西播磨地域には約2,400名もの外国人が生活されていますが、国籍や年齢、その理由もさまざまです。太子町で町内及び近隣市在住の外国人に日本語を教えるボランティアグループの代表として活動されている松本一巳さん。「最初は行政からの要請を受けてスタートした支援でしたが、この地域に来て良かったと少しでも思ってもらえるように活動しています」とお話し下さいました。

「言葉だけでなく文化や生活スタイルを伝えたいと多文化共生に取り組み、少しでも学習に参加しやすいようにと時間帯を工夫したり、学習に専念していただくために、子ども同伴参加も歓迎してきました。また、子育て支援や悩み相談、時には企業や団体との仲介役もしてきました」「少しでもこの地域での生活や交流を満足いくものにしてほしいと願いながら、帰国して母国で日本の良さやこの地域の素晴らしさを伝えてもらえたら嬉しい」とこれまでの経験をわが子の成長を思い出すかのように優しく語る姿が印象的でした。

(I)

太子町を 西播磨地域と世界の架け橋に



太子日本語学習支援ボランティアグループ
Taishi Japanese learning support Volunteer group

揖保郡太子町竹広36番地28
TEL 090-3927-5421

地域の伝統と共に「記憶」を未来へ

毎年8月9日、上月城の麓に鎮魂の行燈に優しい灯が灯る。平成21年に佐用町全域で発生した水害によって失われた魂の鎮魂を祈る行事だ。楮を原料とした伝統技術で手作りされる「皆田和紙」の行燈は、皆田和紙保存会の皆さんを中心に子供達も参加して心を込めて作成されている。地元の小中学校や高等学校へも出前授業を実施し、子供たちに郷土の忘れてはいけない「記憶」と共に先人の技術や知恵を伝えている。故郷を愛する心が未来の故郷を作る活力となることを願って。

西播磨の山城巡りの御城印にも皆田和紙が使用され、体験に来られる方も増えている。体験された方の中から後継者が現れてくれることが課題だ。(M)



皆田和紙保存会
Kaita washi Preservation Society

佐用郡佐用町上月373番地 (上月歴史資料館)
TEL 0790-86-1616
<https://local-history-museum-86.business.site>



NPO法人 上郡ひがし蔵net
Non-profit organization Kamigori Higashikura net

赤穂郡上郡町上郡825
TEL 0791-52-6502
<https://npohigashikura.com>



笑顔あふれるまちの交流拠点をつくる

平成7年、『ギャラリーひがし蔵』として生まれ変わった旧西脇酒造東の蔵。平成29年に元オーナーより運営を引き継ぎ、「しゃべり場・遊び場・出会い・ふれ合い・笑って・歌って」を合い言葉に活動しているのが「NPO法人上郡ひがし蔵net」です。フリーマーケットや作品展などのイベント開催、喫茶営業等を通して人々が集うホットな場所は、コミュニティの拠点としての役割を担っています。スタッフの方は、現役で働いている人もおり、出入りも多く時々人手不足に陥ることもあるが、相互の助け合いで補っている。また、建物のスペースは十分あり、有効活用できれば魅力溢れるイベントの開催が可能です。その為には、2階部分に消防法上の対策が必要になります。

その暁には、上郡文化発展の中心地「ひがし蔵」を一段と輝かせ、周囲の自治体と連携を強化していくことにより、その存在感が増すであろうと期待します。(H)

世代をこえ、地域を超えて未来を照らす、まちの道しるべ

「ローカルからワクワクするしごとを創ろう!!」をミッションに掲げる『コバコ株式会社』代表取締役の谷口悠一さん。ふるさとの佐用町で地方における人口減少を食い止めたい!と、人が集まれる場所・仕事創出拠点として【泊まれるコワーキングスペース「コバコWork&Camp」の運営や【新規事業創出支援】【経営管理デザインコンサルティング事業】に取り組まれ、『チャレンジしやすい町・佐用』を目指しておられます。【さよう星降る町のビジネスプランコンテスト】もその一つ。

みんなで創り出す場がそれぞれの『強みの取引所』になればと語られる姿は、佐用町のみならず西播磨地域の明るい未来を照らす道しるべのようでした。(I)



コバコ株式会社

cobaco inc.

佐用郡佐用町佐用2828-10
TEL 0790-71-0024
<https://cobaco.co.jp>

【HP】



感動を魅力に! たつの観光の「案内人」

ヒガシマル醤油の香り漂う龍野橋の東詰めにレトロな喫茶・ギャラリー「ガレリア」が建っている。お店の窓からは鶏籠山と揖保川、そして龍野城下町が一望できる。龍野観光の玄関口である姫新線「本竜野」駅から城下町を目指す道中であり、「ここに来られる人はおもしろい人が多い」と語るオーナーの井上美佳さん。ガレリアは長年、カフェ以外に龍野城下町で活躍する文化や芸術など様々な団体のつながりの場であり、広報・発信の場であった。龍野から内外の芸術を発信する「龍野アートプロジェクト」は10年を区切りに今年から「たつのアートシーン」へと発展した。

龍野の多くの魅力をどのようにストーリーにし、どう伝えていくか、ガレリアはこれからも、地域の人と人、地域と龍野を訪れる人を結びつけていく。(M)

【HP】



ガレリア アーツ&ティー

Galleria Arts & Tea

たつの市龍野町富永1439
TEL 0791-63-3555
<https://galleria-arts.wixsite.com/galleria-arts>

まちの人と未来をつなぐ、住まいと暮らしのコンシェルジュ



宍粟まちづくり株式会社

Shiso City Planning Co.,Ltd

宍粟市山崎町山崎124番地1
TEL 0790-62-2424
<https://www.shiso-machi.com>

【HP】



「地方創生は、補助金ではなく事業や投資で実現する必要がある」と語る『宍粟まちづくり株式会社』社長の三木秀章さん。「新たな人(若者や女性等)を呼び込み、これまでと違う町に生まれ変わらせた!」と自身の町屋再生事業への想いを力強く話されました。きっかけは山崎中心市街地活性化委員会での【よいまちプロジェクト】。地域をもっと楽しく!!と、トライ&エラーを繰り返しながら新しい時代を創ろうとされています。

まちの歴史や町並みを大切にしながら、そこに新たな賑わいを生み出すには「デザインや発信力が大事!」と今進めているプロジェクトをキラキラした目で教えて下さいました。

そんな三木さんは、古いものと新しいものとの融合に寄り添いながら、このまちの人や未来をつなぐ案内人(コンシェルジュ)として新しい出会いを生み出しています。(I)

日本人の魂が入った「日本刀」作刀技術の継承



桔梗準光鍛刀場

Swordsmith Hayamitsu Kikyo Factory

相生市矢野町瓜生羅漢口28 羅漢の里
TEL 090-8358-4748
<https://www.hayamitsu.com>

【HP】



武士の時代が終わって150年以上が経ったが、現代にも日本刀に魂を入れ続ける刀鍛冶が相生にいます。近年ではアニメ「鬼滅の刃」が世界的に人気を集めているが、その中でも登場するのが日本刀だ。日本刀はその魅力に取りつかれる人も多く、また工芸品として世界的な評価も高い。作刀は原料の玉鋼を打ち伸ばすことから始まるが、刀にまで仕上がるには気の遠くなるような工程がある。炭で鉄を1300℃まで熱し、叩きのばし、鍛える…火花が飛び散り、激しくも妥協は許されない工程を「鍛錬」という。日本人の心を鍛えてきた古からの技術だ。またその作刀工程から生まれた言葉は多い。

西播磨の最北、宍粟市千種町ではかつて「千草鉄」が生産されていた。千種中学校の生徒が学習で生成した千草鉄で短刀を作る試みも成した。海外からの観光客にも作刀体験は人気だ。技術の継承なくしては、古代から受け継がれてきた日本人の魂が現在に新たに生まれることはない。(M)